

2025年3月9日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教28「己に死してこそ」

申命記8：1～3、ヨハネ5：37～40

イエスさまは、「わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる」（37節）と言われます。人間の証しは不完全ですが、父なる神さまは、イエスさまの完全な証言者です。そしてそのイエスさまについての完全な証言が記されているものが、わたしたちが手にしている聖書に他なりません。ただ、それを正しくイエスさまの証言として読むことができるか。聖書から証言の内容を正しく受け取ることができるか。聖書を読む側の問題がここで問われています。イエスさまは、その問題をここで厳しく問われています。「あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ」（38～39節）

ここでの「聖書」は旧約聖書のことです。申命記に「今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる」（申命記8：1）とありました。ユダヤ人はこの御言葉のとおり、戒め、律法を重んじました。それが「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している」という部分に表れています。実際に律法学者は、聖書に永遠の命があると考えて、一生懸命、聖書を研究しました。けれども、その命に行き着かない。聖書を読んでいるのに、聖書の伝えようとしている真理がわからないというのです。

実際に「聖書読みの聖書知らず」ということがあります。聖書を学問の対象として読む人たちもいます。東京大学にも文学部に西洋古典学という学科があり聖書の研究を専門にしている人たちがいます。優れた研究がなされますが、それが信仰に結びつくかという点必ずしもそうではありません。礼拝の説教は、会衆の知的欲求を満たすことが目的なのではありません。イエスさまを証しすること、十字架とよみがえりの救いを伝えることです。逆に言えば、それ以外のことを説教に期待してはいけません。世の中のことが知りたければ、テレビや新聞、インターネットで十分でしょう。そういう話を聞きに教会に来ているのではない。わたしたちは、イエスさまの証言を聞きに教会に来ているのです。

でもどうしてイエスさまの証言を聖書から聞き取れないのでしょうか。わたしたちは何か上の空で、人の話が耳に入っていないことがあります。聖書を読む、説教を聞くときも、別のことが邪魔をしてイエスさまの証言が聞き取れないことがあります。それこそ聖書を自分の研究の対象としているなら、自分の関心のあることばかり聞こうとしてイエスさまのことが入っていないでしょう。あるいは自分に都合よく聖書を読もうとしていることがあります。例えば、自分の考えを正当化するために聖書を利用することがある。まず自分の考えありきで、そこに聖書を合わせようとする。それではイエスさまの証言は聞けないのです。

ラジオは、聞きたい番組の周波数にチャンネルを合わせないと番組を聞けません。そのようにわたしたちも自分を変えないで、見当違いのところを一生懸命聖書を読むようなことをしている。それが「あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである」（38節）ということなのです。「父がお遣わしになった

者」とはイエスさまのことです。イエスさまのことを信じないで、イエスさまにチャンネルを合わせないで、いくら聖書を読んでも、神さまの証言は正しく入ってきません。

「聖書はわたしについて証しをするものだ」(39節) イエスさまは、はっきりと教えられます。イエスさまにチャンネルを合わせること。そのようにして自分を変える勇気を持たなければ、いつまでも聖書は自分の中に入って来ません。ユダヤ人たちはそういう間違いをしました。「あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしなさい」(40節) イエスさまのところに来ようとしなさい。イエスさまにチャンネルを合わせない。イエスさまよりも、自分がいかに聖書に忠実であるか。自分の考えがいかに正しいか。わたしたちもそのように考えて聖書を読んでいないでしょうか。

わたしが東神大に入学したのは1989年、当時の学長は左近淑先生でした。旧約聖書の新進気鋭の学者でした。ところが1990年9月に急逝されます。現職の学長の死は当時学生たちに衝撃を与えました。のちに左近先生の説教集『だれも奪えぬ自由』が出されましたが、その中に、わたしが入学した時の入学式の説教が掲載されています。今でも、時々思い出してはその説教を読み返します。その説教は「セミナー、己に死す道場」という題です。東神大は大学ですが、英語では「セミナー」と呼びます。セミナーは「苗床」という意味で、種を発芽させて苗にするところです。種は、はじめ固い種皮に覆われています。この種皮が破れて発芽する。それをこの福音書では「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(12:24)と表現しています。そのように自我、エゴが破れ、己が死ぬ。何よりその場所がセミナー、神学校だと左近先生は入学式の式辞で言われました。「御言葉に聞くことによって、己に死んだ者が、主によって、上なる方によって新たに生かされる道場」であると。そしてキャンパスの満開の桜を見ながら、「花びらが散り始めています。この散る桜から私どもは自己の召された生の運命を学ぶべきでありましょう」と語られました。

けれども、わたしたちは死にきれないのです。この固い種皮が破れない。だから正しくイエスさまの証言が聞けない。でも、そのように己に死にきれないわたしたちだからこそ、イエスさまが死んでくださったのではないのでしょうか。わたしたちのエゴ、この固い種皮をその身に負われて、イエスさまは十字架で死んでくださいました。このイエスさまの死に合わせられて、わたしたちも死に、そこから新たな命を得るのです。そこでこそイエスさまの証言を聞くことができるのです。人間の語る証言はどこまでも不完全でしょう。けれどもその不完全な証言がイエスさまの生きた証言となるとすれば、それはわたしたちが己に敗れ、己に死すところでしょう。聖霊に導かれ、己を虚しくして、謙虚に聖書に耳を傾ける時に、そこにイエスさまの証言が静かに聞こえてきます。

天の父よ。自分が邪魔をして聖書から正しくイエスさまの証言を聞き取ることができない弱さを覚えます。けれどもだからこそイエスさまが十字架で死なれ、このわたしたちのエゴ、罪を打ち砕いてくださいました。そしてよみがえりによって、わたしたちにその証言を聞き取る信仰の耳を与えてくださいます。どうぞ、イエスさまによって、御前に虚しくされ、あなたのみ声を聞く者とならせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。